

教育学部学生の学習生活と意識についての 調査研究 (第4報)

岡本 洋三

(1986年10月15日 受理)

Research on the consciousness and life of students
in the Faculty of Education, Kagoshima University
— Report IV —

Hiromi OKAMOTO

1 はじめに

筆者は同題の第3報で、学生の生活と意識について行った調査の回答パターンを数量化3類によって解析し、その回答パターンから学生の生活と意識の状況を類型化し、その特徴を定性的に明らかにした。本報告は、そこで示唆された高校時代の思索体験と大学の学習生活との関係、大学での学習と社会意識との関係について量的な特徴を報告する。調査の概要や質問文などは、前報を参照していただきたい。

2 高校時代の思索体験と大学での学習生活の状態

2-1 高校時代の思索体験についてのまとめ

第1表 高校時代に考えたことがあるかの総括表(%)

質問項目	よく	男		女		ときどき	男		女		あまり	男		女	
		男	女	男	女		男	女	男	女					
現在の生き方	28	*22	*31	53	55	55	18	*24	*14						
将来の生き方	28	26	30	57	62	61	15	12	*9						
将来のしごと	47	46	*63	41	43	*33	12	11	*4						
生きる意味	17	*11	*20	34	*40	29	49	49	51						
家出	3	0	5	14	15	16	82	*86	78						
勉強する意味	22	20	23	55	*61	52	23	20	*25						

(大文字の数字はサンプル全体、男は教育男子、女は教育女子についての%である。全体の分布からみて特徴的な数値に*印をつけた。以下同じ。)

高校時代に多くの学生は「人生」についてそれなりに考えているが、約2割前後の学生はあまり考えたことがない。とくに「生きることの意味について」という抽象的・哲学的な思索はほぼ半数の学生が考えたことがない。それとは対照的に「将来の仕事や職業」という現実的な問題についてはほぼ9割弱の学生は考えている。また「勉強することの意味」という問題も、大学を目指している学生であるにもかかわらずあまり考えられていない。

これらの点で今日の大学生は「知識青年」に期待される思索体験を十分に重ねているとはいえない。全体的に女子学生の方が相対的に「思索的」であるような結果であるが、教育学部と他学部の女子学生(データの掲出は省略した)ではかなり異なった傾向が見られるので単純に「性差」と考えることはできない。この僅かな質問の回答状況で結論めいたことは言えないが、教育学部の女子学生には進学にあたって「将来の展望」や「職業」について「よく」考える者が多く、そこに「自立」への意識、自覚の契機があるように思われる。この点において進学する学部が将来の職業との関係が明確な教育学部とこの調査における他学部(例えば、法文学部)との違いがあり、他学部の女子学生には「考えない」学生がやや多く、意識の差が見られる。

家出についての設問は、青年期の精神的悩みの深さ、強さや自立への過程を家庭、家族、親との葛藤の面においてとらえようとしたものである。「あまり」が82%で、家庭の問題では多くの学生は深刻な葛藤がなかったようである。これは性差がかなり大きく、とくに「他学部・女」が「よく」8%、「ときどき」23%で、悩みを強く感じている者が多い。

2-2 青年の発達の条件

第2表 読書・親友 (%)

	全体	男	女
読書 好き	71	*58	79
友いなかった	15	16	11

青年が人間的に成長・発達していくためには欠かせない「読書」「親友」の状況は第2表のとおりで、教育の男子では読書好きは6割以下であり、「心を許しあえる友」が「いなかった」が16%もいる。この親友がいない学生は「他学部・男」では20%で、男子に問題がありそうである。

2-3 大学進学目的・気持

第3表 大学進学のための目的・気持（% 2つ選択）

進学の目的・気持	全体	教・男	教・女	他・男	他・女	思1	思4	思索
専門的な資格を	◎44	◎60	◎62	24	20	29	48	○
将来を考える	◎36	30	◎36	◎44	◎38	42	39	
大学生活をエンジョイ	◎30	◎36	20	◎28	◎42	42	18	○
専門的な学問を学ぶ	28	◎32	◎24	◎32	◎28	13	33	○
大学卒の学歴	14	10	14	20	12	17	13	
教養を身につける	14	6	16	12	26	8	11	
もっと深い勉強	10	4	12	14	8	7	20	○
高卒で就職はいや	10	6	8	10	18	14	8	
みんなが行くから	6	8	6	6	8	12	5	

この質問は「あなたの大学進学のための目的・気持に最も近いものを2つ」を選んでもらったので、回答%の合計は200（無回答がある場合は200以下）になる。表頭の「思1」は高校時代の思索体験の少ない学生、「思4」は豊富な学生の回答である。「思索」はこの思索体験の違いが回答%に大きく影響しているものに○印をつけた。また、各群（属性別）で回答の%の計が100%を超えるところまで多いものから順に◎印をつけた。つまり延べ数で半数以上の学生が選択した項目である。ここでは教育学部の学生の特徴をはっきりさせるため他学部のデータ（他）を併記した。

全体では、免許・資格という「現実的実利的な目的」が最も多く、次に「将来のことをゆっくり考えたい」という「モラトリアムの意識」と「大学生活をエンジョイしたい」という、今日の青年が「発達を延期させられている」ことからくる要求が続いている。「専門的な学問・技術を学びたい」という回答もかなりある。「教養」と答えたものはかなり少ない。「もっと深い勉強がしたい」というのは10%である。これは目的としてはあいまいであるように見えるが、大学に進学する意識としてはこのような意識がもっとあってもよいと思われる。「学歴」、「高校卒で就職したくない」、「みんなが行くから」は進学の意識としてはかなり消極的であいまいな意識を示すものであるが、合計すると、30%になる。これらを類別すれば、モラトリアム、エンジョイが66%でもっとも多く、次が資格と教養で58%、「学問への要求」を基本としたものは38%、あいまいな意識が30%ということになる。

この質問では、学部別、性別で意識の違いがかなりみられる。教育学部では学部の性格を反映して「免許・資格」が6割である。それに続く目的では男子は「エンジョイ」「専門の学問」であるが、女子は「将来」「専門の学問」であり、その意識においてより積極的である。これに対して、他学部（恐らく法文学部の影響であろう）では「将来」が4割前後である。順位の違いはあるが、

他学部ではこの「将来」と「エンジョイ」というモラトリアムの意識が支配的で、それに「専門の学問」の3つで100%を超える。他・女子に「エンジョイ」が多いのが特徴的である。

また、高校時代の思索体験は「専門的資格」「専門の学問」「深い勉強」のような好ましい回答を増大させ、「エンジョイ」のような好ましくない回答を減少させるように影響している。

2-4 入学時の大学生活への期待

学生が入学当初に大学生活に期待していたことを7選択肢から2つ選択した結果を、第4表に示した。全体では、上位3つは「自由な時間」「交友」「サークル活動」で、その合計は140%である。即ち、前問では進学目的として「免許・資格の取得」が44%、「専門的な学問・技術を学ぶ」、「教養」、「深い勉強」などの計が52%、これらを合計すると96%になり、学生は大学に進学する意義をそれなりに意識しているのであるが、学生の実際の期待では「学ぶ」ことへの積極的な姿勢は極めて弱く「講義」への期待はわずかに18%である。この上位3つは先にも述べたように、確かに青年の発達に必要な条件であり、経験であり、それらがこれまでの生活において十分に保障されてこなかったことの「ツケ」がここに現れているのだと思われる。したがって、これらに対する期待が大きいことも問題であるが、それよりも学生に大学の「講義」にたいする期待があまりにも少ないという点が問題である。また、「趣味を深める」という多分に「個人的、孤立的あるいは自閉的」なイメージを感じさせる回答が20%、「親から自由になる」という大学との関係でいえば「消極的」な期待が16%ある。先に、青年の中に「親友がいない」者が少なくないという問題を指摘したが、恐らくこれらは相互に関連がある事柄ではないかと思われる。これも高校時代の思索体験の状況と関連があるが、進学目的よりもその差はやや小さくなっている。

第4表 大学生活への期待 (% 2つ選択)

期 待	全体	教・男	教・女	他・男	他・女	思1	思4	思索
自由な時間	◎64	◎60	◎70	◎64	◎60	77	61	○
交友	◎40	40	◎44	◎36	38	39	28	○
サークル活動	36	◎44	32	32	◎40	30	36	
趣味を深める	20	22	20	18	30	12	30	○
講義	18	16	22	20	16	12	25	○
親から自由に	16	12	12	22	10	19	15	
他	6	6	2	10	4	12	7	

2-5 教養課程の学生生活の状況

学生は、教養課程の学生生活をどのように過ごしてきたか、充実感を持てたか、どのようなことに充実感を覚えたか（7選択肢から2つ選択）を第5表に示す。

「充実」とはっきり肯定する者は僅かに14%、「むなしさ」を感じている学生はその2倍もいる。本来もっとも活力が溢れているはずの青年期に、その生活に充実感を持ち得ない学生が3割弱もいる。もっとも、第3報で指摘したように、充実感の有無が学生のどのような状態の反映であるかによって解釈は異なってくる。学生の充実感の対象は、圧倒的に交友とサークルである。この2つで100%を超え、期待とほぼ同様の傾向である。次にやや%は低くなるが30%（「期待」では20%）の学生が「趣味的活動」に充実感を感じている。ここにも、先に「孤立・自閉的な」として指摘した問題が現れている。また、「アルバイト」と回答した学生も28%と無視できない数である。そして、大学生活で中心を占めるべき「学問的な面」に充実を感じた学生は僅かに10%で、「期待」では少ないながらも18%の学生は「講義」を挙げていたが、実際にそこに充実を感じた学生は「趣味」の場合とは反対にほぼ半減している。これも思索の程度との関連は認められるが、その差は大きくない。つまり思索の違いは、学生の実際の生活ではあまり現れないのである。

第5表 充実と充実感の対象 (％)

	全体	教・男	教・女	他・男	他・女	思1	思4	思索
充実していた	14	15	12	17	8	17	13	
とくに不満なし	59	66	57	58	53	59	48	○
むなしい感じ	28	20	31	25	40	23	39	○
交友	56	◎66	◎56	◎52	◎46	59	46	○
サークル	48	◎52	◎56	◎44	◎38	54	52	
趣味	30	30	30	28	36	28	28	
アルバイト	28	26	22	◎34	◎38	26	30	
学問	10	6	10	10	12	4	18	○
他	10	6	6	16	10	14	7	
社会的活動	4	2	2	4	2	4	3	

2-6 学生の意識の類型化

学生の大学進学, 期待, 充実における意識の特徴を, その回答の組合わせから調べた結果が第6表である。ここにはその組合わせで回答した学生の割合が5%以上のものを掲げた。

第6表 学生の意識の類型

進学目的	%	期 待	%	充 実 感	%
資格×将来	12	自由時間×交友	20	交友×サークル	26
資格×学問	10	自由時間×サークル	16	交友×アルバイト	11
資格×エンジョイ	9	自由時間×趣味	11	交友×アルバイト	9
将来×エンジョイ	6	交友×サークル	11	サークル×趣味	8
学問×エンジョイ	5	自由時間×講義	6	アルバイト×趣味	6
学問×将来	5	自由時間×親から自由	6		

進学目的では, 多くの学生は「資格」, 「学問」という大学の機能と「将来」, 「エンジョイ」という自己の発達の要求との組合わせで回答しているが, 期待では大学にたいするものは僅か6%になり, 実際の充実感では大学の機能にかかわるものは全く無くなってしまふ。また, その%を見ると期待では多様なタイプの学生が見られるが, 期待, 充実と現実に近くなるほどタイプの均質性が増大していくことがわかる。

多くの学生は入学のときには, それなりに大学で「学ぶ」ことを意識しているのであるが, 実際の生活では大学の教育に充実感を持ちえないでいる状況をどのように打開していくかが, 大学に問われているといえよう。

2-7 教養の学習生活の実態

学習生活の基本的特徴を「出席」「受講の姿勢」「講義の影響」の3つでとらえ, それぞれの回答を良好, 普通, 不良の3つにまとめて第7表に示す。良好は, 出席では良いと良いほう, 姿勢では7科目以上, 影響では5科目以上まとめた。不良は, 出席では悪いほうと悪い, 姿勢では3科目以下, 影響では1科目以下をまとめた。

教育学部生の教養時代の学習生活は, 一言でいえば「出席はするが学ぼうとはしない」といえよう。しかし全ての学生がそうだという訳ではない。多くの講義にたいして積極的な意欲を抱いて聴講している学生も12%いるし, その科目数を4以上でみれば, 50%を超える学生は学習意欲を

第7表 出席/姿勢/影響（% 大数字は全体 男女は教育学部）

項目	良好	男		女		普通	男		女	
		男	女	男	女		男	女		
出席	30	26	44	54	56	46	16	17	10	
姿勢	11	12	12	40	37	46	49	50	43	
影響	4	7	2	48	38	60	47	55	38	

持っている。ところが、講義からの影響をどれほど感得したかといえば、5科目以上という学生は僅かに4%という状態である。教育学部では、ともかく影響があったという2科目以上の回答を含めてようやく男子で45%、女子で62%である。根本的には学生の主体性の問題であるが、大学として学生の主体的な学習への意欲をどのようにして触発したらよいかを工夫する必要がある。

「出席」、「姿勢」、「影響」のクロスをすると、「出席」と「受講姿勢」との間には明らかに関連性が認められ、「関心受講」4科目以上の学生の%でみれば、64→38→15と変化し、出席の「よい」「普通」「悪い」の間にはかなりはっきりとした差異が認められる。「出席」と「講義影響」との間にも関連性が認められ、それは「影響少」の部分において明確である。影響がほとんどなかったという回答の%は、出席良好から不良へと顕著に増大（38→54→92%）し、出席不良者のほとんどが講義からの影響を受けていない。姿勢と影響は3者のなかでもっとも明確な関連性を示している。「影響大」の%では、54→12→2と変化し、受講における学生の自発的積極的な姿勢の強さが講義からの学問的な影響を感受するかどうかに関接な関連を示している。

3 専門課程における学生の生活

3-1 充実感と充実の対象

専門課程における学生の生活も教養課程と同じ内容で調査した。学生が教養から専門に進むなかでどのように変わっていくかを示すため、以下の表では比較のために教養の%値を再掲した。

第8表に示すように、専門課程における学生の充実感は明らかに教養課程より多くなっており、また、充実感を感ずる対象がかなり変化していることがわかる。「交友」の%はほとんど変化していないが、「学問」は4.4倍に増加し第2位になり、半数近い学生が「学問的な面」に充実感を抱いていることが示されている。「趣味」は変化がないが、「サークル」は20%減少している。これは専門課程に進学してサークル活動から引退する学生が多いからであろう。また、「アルバイト」が半減している。

第8表 充実と充実感の対象 (%)

	全体	教養	教・男	教・女	他・男	他・女
充実していた	22	14	24	*32	*12	15
とくに不満なし	63	59	66	58	63	*73
むなしい感じ	15	28	11	*9	*25	13
交友	54	56	56	50	56	50
学問	44	10	46	*50	*32	42
趣味	30	30	32	*28	32	*36
サークル	28	48	*32	28	28	*12
アルバイト	14	28	14	*12	14	*22
他	14	10	12	*8	*20	18
社会的活動	0	4	2	0	2	0

「充実」では、性差、学部差がみられる。教育学部は他学部より「充実」と答えている学生が多く、特に「教・女」が多い。充実の対象も「学問」が50%になっている。「サークル」は「教・男」が多い。「他・女」では「趣味」「アルバイト」が相対的に多く、「サークル」が少ないなど他の群とはかなり違う傾向がみられる。各項目毎に比較すると、教育・女と他・女との差異がきわだっていることがわかる。

3-2 専門課程における学習生活の状態

第9表 出席/姿勢/影響 (%)

項目	良好	教養	男		普通		女		不良	教養	男		女
			男	女	男	女	男	女					
出席	35	30	36	50	48	54	51	42	17	17	13	8	
姿勢	23	11	32	27	34	40	30	38	43	49	39	35	
影響	17	4	18	23	54	48	51	56	29	47	30	22	

専門課程における学習生活の状態を、出席、受講の姿勢、講義の影響で見よう。大文字の数字は全体での%、教養は教養時についての回答%である。

「出席」は全体的に大きな変化はないが、教育では男女ともに若干よくなっている。「受講の姿勢」は全体的によくなっているが、「不良」の部分依然として43%とかなりいる。教育は男女ともによい。「影響」もかなりよくなっている。教育・女は「影響良好」が一番多い。

このように「教養」時と「専門」時の比較では学生の学習生活は全般的に良い方向に変化している。それは恐らく学生自身が専門課程に進学して学習への自覚を深めるからであろう。専門課程についても「出席」×「受講姿勢」、「出席」×「影響」、「受講姿勢」×「影響」のクロスを検討したが、教養課程における関連性の場合と同じで、「受講姿勢」と「講義影響」がもっとも強い関連を示し、次が「出席」と「受講姿勢」との関連性で、「出席」と「講義影響」の関係が一番小さい。そこでこの3者の間には「出席」→「受講姿勢」→「講義影響」というような関係があることが推測できる。なおこの関連性は全体として教養課程よりも専門課程では強くなっている。

3-3 専攻の学問領域にたいする適性

「適性」は学年とともに自覚されてくる傾向がある。59年入学（2年次）は教育学部66%、他学部16%であるから、教育は「適」が少なく「わからない」が多くなってよい筈であるが、結果は相対的にはむしろよい。しかし教育の女子は「わからない」が少なく「適していない」という者が多い。

第10表 専攻の学問領域にたいする適性（%）

項目	全体	教・男	教・女
適している	44	*46	45
わからない	44	46	39
適していない	12	8	*16

3-4 勉強時間

これは「最近数ヶ月のあなたの勉強時間（講義など正課以外の学習活動の時間—例えば研究室での実験、図書館での文献調査や読書、研究会での学習や自宅での学習などをすべて含めます）は、平均1日何時間くらいですか。おおよその見当で教えてください。」という質問の結果である。2時間以上の回答が少ないので、2時間以上でまとめている。

第11表 勉強時間 (%)

	全体	教・男	教・女	他・男	他・女
1時間以下	45	51	*52	*35	40
1～2時間	31	32	30	29	38
2時間以上	24	*18	*18	*35	24
2～3時間	11	7	10	14	13
3～4時間	7	4	5	12	8
4時間以上	6	7	3	9	3

まとめた数値で比較すると、教育の男女は差がなく、勉強1時間以下が半数を超えている。他学部では男に比較的勉強時間の長いものが多い。これまでの学習生活についての質問では教育学部の女子に好ましい回答が多く、他学部の男子は否定的な回答の%が多かったが、勉強時間では全く反対の傾向が示されている。

3-5 学習成果についての自己評価

学習成果についての自己評価は4段階（自信がある、ある程度は、あまり自信はない、ほとんどない）で、大学生としての一般的教養、自分の所属している学部での共通の基礎知識や学力、自分の専攻している専門領域の基礎的知識や学力、あなたは自分は〇〇を専攻し、それについては専門家であるといえますか、を訊ねたものである。「自信がある」という回答はいずれの質問でも極めて少ない（最大で7%）ので、ここでは「ある程度は」と合計して「自信」とした。

第12表 学習成果の自己評価 (%)

	自信	男	女	あまり	男	女	なし	男	女
一般的教養	51	56	*38	42	40	*57	7	4	5
学部共通	40	42	*35	49	51	*57	11	7	8
専攻基礎	42	48	*32	41	40	*50	17	13	19
専門性	15	16	*10	39	*46	41	45	*38	49

一般的教養は、自信あり、なしがほぼ半々である。「自信」は他学部男子が60で最大、教育女子が最小である。学部共通は全体的に「自信」が減っている。これも教育女子が最小である。しかし「ほとんどなし」は、他学部女子の25%がきわだっている。専攻基礎も同様の傾向であるが、「なし」が増えている。これも前項と同じで「自信」は教育女子が最小、「なし」は他学部女子が最大（23%）である。専門性は最も悪い。「なし」は他学部女子で58%もいる。

学習成果の自己評価は全体的によくはない。特に女子にその傾向が顕著であるが、学力は学習の蓄積でもあり学年と深く関連するので、学年でのクロスを見なければ上記の評価は確定できない。

そこで学年別のクロス結果を検討してみよう。入学年56年以前は男子13名のみで女子はいないので、クロスから除いてある。また57年入学は男子で28名、女子で11名でサンプル数が少ないので、%値の比較においてはそのことを考慮する必要がある。

第13表 学習成果の自己評価の学年別クロス

	男 59入	58入	57入	女 59入	58入	57入
教養自信	53	59	*68	39	38	*73
あまりない	39	33	32	55	51	18
ほとんどない	9	8	*0	6	11	9
学部共通自信	42	38	*58	29	*42	*55
あまりない	42	51	43	62	38	46
ほとんどない	15	11	*0	9	21	*0
専攻基礎自信	36	47	*71	26	*44	36
あまりない	42	38	25	53	34	55
ほとんどない	22	16	*4	21	21	*9
専門性自信	12	14	*36	10	*8	*18
あまりない	36	45	*39	35	42	*55
ほとんどない	53	41	*25	55	49	*27
サンプル数	59	84	28	87	53	11

男女ともに学年が進むにつれて「自信」が増大し「自信がない」が減少していくことがわかる。従って先に各項目毎に指摘した特徴は、それぞれの区分における学年構成の違いが織り込まれているので、単純に学部・性別の差ではない。（例えば、教育女子は2年が多い。）しかし性別では、全体的な傾向として男子のほうが「よい」自己評価をしているものが多く、自己評価には性による

特徴があるように思われる。前述したサンプル数の問題はあがあるが、4年次になると「一般的教養」と「学部共通」については性差はあまりないが、「専攻基礎」と「専門性」では極めて大きな差が現れている。

4 学生の意識状況

4-1 学生の大学観, 大学教育観

この質問は、A-Eは学生の大学観（イメージ）、F-Gは講義についての態度、H-Kは学習観を尋ねている。それは必ずしも学生の本音を期待しているわけではなく、観念としてもっている建前を尋ねている。回答は、その意見に、賛成、なんともいえない、反対からの選択である。第14表では、賛成と反対の%を示した。

第14表 大学観等についての回答状況

	賛成	教男	教女	他男	他女	反対	教男	教女	他男	他女
A 大学は学問研究	83	88	82	76	93	1	1	0	0	0
B 専門資格を取得	29	36	32	20	30	17	15	16	18	20
C 広い教養を獲得	74	68	74	75	80	2	3	1	4	0
D 自由な時期	83	82	84	83	80	1	1	1	2	0
E 人間的触れあい	90	90	93	87	90	1	0	1	1	0
F 単位さえ	13	13	2	23	15	35	28	56	23	23
G 選り好みせずに	25	24	34	19	20	15	17	7	19	20
H 授業を真面目に	15	16	13	18	10	26	18	23	32	35
I 自分で勉強	86	83	90	85	83	1	0	1	1	0
J 自分で研究	83	83	87	81	75	2	0	1	3	3
K 問題意識を	67	63	79	62	58	2	0	3	3	0

[A] はいわば伝統的な大学観であるが、理念としては肯定者が多く、[B] の専門職養成・資格賦与観は賛成が少なく疑問や反対が多い。教育学部の現実的な性格は[B] を含むので教育学部の学生にいくらか賛成が多いが、その違いは大きくない。[C] の新制大学的な観念はやや賛成が少ない。[D] は学生の実態にもっともちかいと思われる大学観であるが、[A] とあまりちがいは

ない。表現に価値的な印象が薄いため、ためらいがあるのであろうか。その点[E]は実質的にはかなり似かよった観念であるが「成長」という価値的な説明があるので安心して賛成できるのであろう。これの賛成がもっとも多い。

[F-G]の講義についての態度はどちらにたいしても賛成は少なく疑問が多い。これらの回答で「なんともいえない」の選択にいまの学生の正直な面が表れているように思われる。例えば[F]の功利的な考えかたにも賛成できないが、さりとて現実にもそのような姿勢でいることからはっきりと否定も出来ないという感じである。[G]は「まともすぎる」意見で一層否定しにくいようである。この[F-G]では教育学部の女子学生の反応が他ときわだって異なっており、一般的に「真面目さ」の印象が強い。

[H-K]の学習観は[H]にたいしては反対のほうが多く、[K]については反対はほとんどないがやや疑問とするものが多くでている。この部分でも教育の女子学生は相対的に望ましい学習観への賛成が多い。

4-2 自分の大学観・努力目標

質問の[6]では、以上の意見の中から自分の大学観や大学生活における努力目標にもっとも近いものを3つ選ばせた。これは学生の本音に近いものを探るためである。

第15表 自分の大学観・努力目標 (%) 3つ選択

	全体	教・男	教・女	他・男	他・女
E 人間的触れあい	66	◎75	◎63	◎60	◎66
A 学問研究	45	◎48	◎42	◎48	◎45
C 広い教養	39	◎42	◎45	33	◎48
D 自由な時期	39	36	39	◎42	36
J 自分で研究	30	◎42	30	27	24
I 自分で勉強	24	18	24	24	24
K 問題意識を	24	21	24	24	0
B 専門資格	12	12	18	9	9

3つまで回答するので%の合計は300である。選択数の多いものから合計が150%を超えるところまで◎印をつけた。傾向はあまり違わないが、第13表の%と比較するといくらか本音に近ずき、学部、性の特徴がややはっきりでているようである。

4-3 社会観・人生観・職業観

- この質問は9群から構成されている。作成者の意図した質問の領域と内容的特徴を示すと、
- [A-C] は生きかたとのかかわりでの社会観 (社会にたいする肯定的態度/思考停止的あきらめ/快樂主義)
- [D-E] は現状認識 (批判的/肯定的)
- [F-G] は社会とのかかわりかた (他人まかせ-追随型/主体的な参加意識)
- [H-M] は社会生活の意識, 処世術 (社会信頼/拜金主義/人間不信/人間信頼/期待抑制の処世観/楽天性)
- [N-R] は将来の職業選択の基準 (安定志向/収入重視/社会的価値重視/自己能力の実現重視/個性, 性格の重視)
- [S-T] は生活姿勢 (積極的, 競争型/マイペース, マイホーム型)
- [U-V] は学歴についての意識 (学歴主義的, 依存的/実力主義的, 主体的)
- [W-X] は職業の選択と大学での学習との関係 (学習との関係重視/関係消極的)
- [Y] は職業選択と生きかたとのかかわり (人生論的)

以上が、質問文作成にあたっての質問の狙いである。このような意識や価値観についての質問は先に第3報でも示したように、作成者の思考の枠組どおりに理解されるとは限らないので、それぞれの質問が回答者にどのような文脈でとらえられたものかを吟味しながら結果の解釈をする必要がある。この点は第3報でも検討したところであるが、ここでは全体的な回答状況を示す。

第16表 生きかたとのかかわりでの社会観

(%)

社会観	賛成	教男	教女	他男	他女	反対	教男	教女	他男	他女
A 社会肯定的	42	47	*34	46	43	8	5	8	7	*15
B 思考停止的	13	11	10	*17	13	41	38	*49	41	*28
C 快樂主義的	27	22	20	32	*38	23	21	*32	18	18
D 批判的	40	41	47	*30	45	4	3	2	*9	3
E 肯定的	39	36	*34	44	48	17	21	16	16	18
F 追随型	26	*18	31	23	*38	10	8	5	*20	3
G 主体的参加	25	*30	25	23	23	17	11	10	*25	23

H社会信頼	6 1	5 7	6 4	6 1	6 3	9	7	7	1 0	* 1 5
I 拝金主義	9	9	5	* 1 4	8	4 5	4 9	4 6	4 1	4 3
J人間不信	1 7	1 1	1 0	* 2 4	2 0	2 9	2 9	* 4 1	2 3	2 0
K人間信頼	5 3	4 7	* 6 7	4 3	5 5	4	3	3	7	3
L期待抑制	2 2	2 0	1 9	2 2	* 3 8	4 2	4 9	4 3	4 1	* 3 0
M楽天性	6 5	6 5	* 7 2	6 0	6 0	6	1	3	9	* 1 3
N安定志向	2 2	3 0	1 9	2 0	* 1 5	3 6	3 0	* 4 7	3 3	2 8
O収入重視	6	7	1	* 1 0	5	4 9	5 1	* 6 1	3 8	4 3
P社会的価値	3 6	4 5	4 1	* 2 8	3 3	7	1	5	* 1 4	1 0
Q能力重視	5 4	5 3	* 6 0	* 4 8	5 3	7	5	3	1 1	* 1 3
R個性重視	8 3	8 7	8 6	7 7	8 3	1	1	0	1	0
S積極的	4 0	4 5	3 0	4 8	4 0	9	7	1 3	7	5
Tマイホーム	5 2	5 3	5 2	4 9	5 5	7	1 2	5	9	3
U学歴主義	1 5	1 6	1 2	2 1	5	3 8	3 3	* 4 6	3 5	3 5
V実力主義	5 4	5 4	6 5	4 5	4 8	5	5	2	8	3
W関係あり	6 2	7 9	7 0	5 2	3 5	2	1	1	3	5
X関係なし	2 4	1 5	1 8	3 1	4 3	3 2	4 2	3 2	2 7	1 8
Y一生の仕事	8 5	8 8	9 2	8 0	7 5	2	0	0	4	3

学生の意識状況の全体的な把握は、第3報で行ったので、ここでは量的な面から若干の特徴を拾いあげてみよう。

[A-C]の生きかたとのかかわりでの社会観では、Aの肯定的な社会観に4割強が賛成であるが、社会の進歩に懐疑的な学生も50%で、意見が大きく分かれている。Cの快樂主義的な意見には半数が態度保留で、これにはっきりと賛成も反対もできない「心理的な同調性」がかなりの学生に窺われる。賛否の状況からいえば、他学部の女子学生は賛成が多く快樂的であり、教育学部の女子学生は反対が多く「真面目」である。この傾向は、Bの思考停止的意見にたいする反応でも見られる。

[D-E]の現状認識では、Dについては、全体として「中間的」な回答が半分以上(56%)であり、これに「否定」の回答をあわせると、6割の学生は「現在の日本の政治」にたいして「危機感」を持っていない。女子のほうが「政治に批判的」である。Eの「社会肯定感」では、全体として「中間的」な回答が43%と多く、反対とあわせて60%が「満足」とは言いきれない「不満感」を抱いているが、賛成(満足)も39%であり、Dとあわせて考えると「不満のなかでの現状肯定」というのが一般的な学生の意識状況であると言えよう。なお、この点でも教育学部と他学部では女子学生の反応には差がある。教育では「現状肯定」にはっきり賛成するものは少なく(34%)「疑問」が50%いるが、他学部でははっきり賛成が48%で多い。

[F-G]の社会とのかかわりかたでは、Fの「自分が先頭に立つのはいやだ」という「他力依存的、傍観的、追隨的」意識は26%で、これを「否定」する者は僅かに10%である。64%は「あいまいな」態度である。現代の学生には青年らしい革新的意欲や自己犠牲的積極性が弱いようである。これはあきらかに女子に多い(特に他学部女)。Gの主体的参加では、これも「あいまいな態度」が58%で、やはり社会に実践的にかかわる態度や意識が弱いことが示されている。この点に関しては、教育学部の男子は相対的に積極性がある者が多い。

[H-M]は社会における生活態度、処世観を尋ねた質問であるが、Hの社会にたいする信頼感を持つものは61%と多いが、30%の保留意見がある。Iのお金だけがという意見には、さすがに賛成は少ないが、これも保留が46%と約半数近く、このような考えかたを否定しきれない今の学生の心理的傾向が示されている。JとKは人間観を不信と信頼の両面から尋ねている。Jの不信感をはっきり否定しているのは29%で、保留が54%であり、他人にたいして全面的に信じきれない気分を表しているようである。しかし、Kの信頼を表明しているのが53%で、保留が43%であるから、自分の対人的姿勢としては信頼の態度をとろうとする学生は多くなっている。LとMも人生にたいする姿勢を悲観的(消極)と楽天的(積極)の両面から尋ねたものであるが、ここでもJ、Kとほぼ同様の傾向が見られる。この一群の質問にたいして教育の女子は男子よりも全体的に積極的な態度をとる者が多い。

[N-R]の職業選択の基準では、Nの安定志向については、保留42%、賛成22%で、そのような気分がかなりの学生を捉えている。特に教育の男子にその傾向が強い。しかし、Oの収入重視には半数の学生は反対である。Pの職業の社会的価値を重視する意見は、教育の男女に多く、教職志望者の意識を示している。しかし、全体としてはこれも保留が57%あり、学生の迷いを覗わせる。もっとも賛成の多いのは、Rの個性重視であり、次がQの能力実現である。これも現代の自己実現を軸とする個人中心的な思潮を示している。

[S-T]は生活にたいする姿勢である。Sの積極競争型よりもTのマイホーム型が多い。これまでの質問では教育の女子に相対的に積極的なタイプが多かったが、Sでは他との比較では教育女子の賛成は少なく、反対が多い。いわゆる猛烈社員的な生活には批判的なのである。この点では他学部男子は約半数が積極競争型である。Tでは学部、性別の差はあまり大きくない。

[U-V]の学歴社会観では、Uの学歴決定論を否定する意見は38%で、それを否定しきれない保留の意見のほうが47%が多い。賛成と保留を合わせて学歴社会観に同調的な者を見ると、教育男子は67%、教育女子は54%で明らかに差がある。Vの主体的な個人の実力に期待する意見でも教育女子は主体的である者が多い。

[W-X]は大学での学習との関係を問うものである。Wの専攻した学習を生かしたいという意見は全体では62%であるが、教育男子は79%で大多数である。教育女子では70%とやや低くなっているが、他学部女子の35%と比べると格段に差があり、学部の教育と職業との関係がはっきりと意識されていることがわかる。Xはこれを反対の面から職業選択における幅の広さを尋ねているが、専門領域との関係を強く希望している者はやはり教育学部が多い。

[Y]では職業を「一生の仕事」として考える者が大多数であるが、ここでも他学部はやや低く、特に他学部女子では25%が「あいまいな態度か否定」である。

職業観では全体的に他学部学生よりも教育学部の学生は積極的主体的であり、学部の性格が反映している。

5 社会意識度と大学の学習生活

社会意識度と大学の学習生活との関係を調べてみよう。

第17表は、教養課程における学習態度と社会意識度とをクロスした結果を要約したものである。

第17表 社会意識度と教養課程における学習態度 (%)

	教養充実	むなしい	出席良	不良	姿勢良	不良	影響良	不良
全体	14	28	30	17	11	49	4	47
意識度1	13	21	30	18	10	*60	3	*60
意識度4	20	22	29	13	13	*33	11	*31

全体での回答率から大きく離れているものに*印をつけた。社会意識度の高低は教養時代では講義にたいする姿勢（学習意欲を反映）や講義の影響（学問的感受性を反映）の不良の部分で顕著な関連を示している。

第18表は、専門課程における学習態度と社会意識度とをクロスした結果を要約したものである。専門課程では、社会意識度の高低は全ての項目で、良い部分でも不良の部分でも顕著に関連していることがわかる。

第18表 社会意識度と専門課程における学習態度 (%)

	教養充実	むなしい	出席良	不良	姿勢良	不良	影響良	不良
全体	22	15	35	17	23	43	17	29
意識度1	*10	14	*25	25	*11	*59	*6	*48
意識度4	*38	7	*47	*7	*47	*20	*44	*16

第19表は、社会意識度と適性、勉強時間、学習成果の自己評価とをクロスしたものである。社会意識度の高い学生には、適性を自覚し、学習成果に自信を持っている者が多く、これらとの関連性は明らかである。(表は、勉強時間3時間以上の者)

第19表 社会意識度と学習の自信 (%)

	適性あり	勉強時間	教養自信	学部自信	専攻自信	専門自信
全体	44	13	51	40	42	15
意識度1	*27	10	44	*30	35	13
意識度4	*64	16	*62	*49	*51	18

以上のように、社会意識度と学習生活の状態との関連は明らかで、特にそれは専門課程において顕著である。この社会意識度と学習との関係は、教養課程におけるよりも専門課程においてより強い関連を示していることから、大学における学習が影響していると推測できる。しかし第3報で説明したように、社会意識度は意識状況を総合的にとらえるために操作的に定義した指標値であり、数値的には同じサンプルであってもその回答パターンは異なるものかもしれない。また、その回答%を見ても、社会意識度4の学生でもほとんどが50%以下の値であるから、この関連性は傾向として言えることであって、学習良好→高い意識度というように直接的に結びつけることはできない。